

効果的なドイツ語教育法 (2)

松 尾 寿

Wie kann man unter schwierigen Umständen den Deutschunterricht
am wirksamsten erteilen?

Hisashi MATSUO
(昭和55年10月31日受理)

(1)

前巻において、学すべき語数・教材論・シンタックスの大胆な導入について述べた。このたびは、初期の導入の方法についての考えと方法について述べてみたい。

ドイツ語の入門段階で大抵の教室で行われている授業形態は次のごとくである。

1. Alphabet の発音練習
2. 単語による発音練習
3. 詞論中心の文法による各種変化の記憶
4. 3 と並行した読本の読解

従来、2 は問題にされることはほとんどなかった。ドイツ語の発音は易しいからすぐ覚えられようとするのは大きな誤りで、第二次言語（たいていは英語である）の言語習慣がある程度身についた学習者にとっては、ドイツ語の発音はやはり難しいのである。「ドイツ語の fein はファインとまっすぐに発音すればよいところを米語流にファーインとしゃくる。man もメァンとやる」などは罪の軽いほうで、ei は絶対に eight の ei と変えぬものもあるし、語末の e は発音上無視するものも多い。こうして2を完全に消化しきれぬまま、教える側では解決を先にのばす。そのうち読めるようになるだろうと楽観してか、あるいは半ば諦めて早く文法に入りたがるのが常である。最近の文法教科書のなかには、初めの詞論の数課に、発音練習を分割して入れこむものが出てきたが、今の学生の多くが読めない事実を証拠だてていると思われる。

さて文法に入れば、規則と変化の連続である。発音練習にたち返る余裕はない。あっても個々に対して注意ぐらいしかできない。学習者から見れば、この時期はまったく受身の姿勢をとらされるのが常である。言葉の数と意思伝達の手段は、第一次言語における幼児にも劣るからである。だからといって受

身でいいかの問題はあとで述べることにして、ここで彼らが英語の発音を身につけるに至る過程を考えてみたい。

中学3年までは新出の単語を、教師の発音どおりに発音し、何となく音韻論的規則性を発見し、または類推していった。彼らは英語の一音素対一文字の連合によらない例で苦勞した。例えば f, gh, ph に対する /f/, j, dg, g に対する /j/ 等がそれである。これらを習得するためには、多くの誤りを経験しなければならなかった。そうして出来あがった規則性を判断する各個人の基準を、ドイツ語学習の時にこわさなければならぬ。例えばドイツ語にはない単語だが、strange, judge をドイツ風にシュトランゲ、ユトウゲと読めと注文しても無理な話である。ひとつ s に限っても、以下の英語が読めるようになっている学習者に対して、「母音の前の s は濁音」となるという定義と、例語数語の提示では、gewesen が出てきたときに、とっさに「ゲヴェッセン」となるのは当然なのである。

seven, sence, sentence, sentimental, send, section, seldom, see, seem, sell, sex, sad, sack, safety, salad, salt, sample, sand,むしろ英語にすぐれている学習者ほど、初期の段階で誤りをおかす例が多い。易しい語だが、英語 same, sad, save, scale の読めるものが初めて sane, sake, satisfy, sacrifice に出会っても、経験上正しく読めるはずであるが、よほど注意しないと、次のドイツ語などは英語流の読み方に流されてしまう。

ich sage, Same, sammeln, Sattel

次の語も同様である。

Titel, kindlich, finden, binden, Biebel, kein, frei, Rhein, ungern, unter, jung, dumm

しかし逆に英語を学んできたおかげで、簡単なドイツ文は、僅かな規則を理解させれば、難なく読めるのである。例えば高専でよく利用される^②テキスト

効果的なドイツ語教育法(2)

(全23課・総ページ数45)の第5課の全部と14課の1/3を示してみる。

Lektion 5

Ich habe einen Hund. Mein Hund ist klug. Du hast eine Katze. Liebst du deine Katze?

Peter hat ein Fahrrad. Er putzt immer sein Fahrrad. Inge hat einen Onkel. Sie schreibt ihrem Onkel keinen Brief. Das Kind hat eine Puppe. Es liebt seine Puppe sehr. Wir lieben unsere Eltern. Liebt ihr auch eure Eltern?

Peter und Monika, sie putzen ihre Schuhe selbst. Putzen Sie auch Ihre Schuhe selbst?

Lektion 14

Letzte Woche bin ich in Paris gewesen. Ich hatte nicht viel Zeit. So bin ich mit dem Flugzeug geflogen. Gewöhnlich reise ich mit dem Zug, und das kostet nicht viel, aber diese Reise im Flugzeug hat sehr viel gekostet. Mein Bruder ist auch mir gekommen.

14課のほうは完了文であることを指示し、過去分詞は文末に位置することを教えておくだけで、意味をくみとることができるのである。その結果、読みに対する姿勢が甘くなり、文法の規則を覚えなければならないという気持ちに緩みが出てくる。また読みとった文章の内容が、だいたい17.8才の学習者の知的関心をひきつけるものが少ないために、甘い姿勢と気のゆるみは増幅されることになる。独作文をさせれば再び既習の英語の干渉が働き、語尾変化はもとより語順はドイツ文法無視の文を作り上げる。

以上述べてきた実態を実証するような、名古屋大学で行われた統一テストの分析を見てみたい。

問題A. 主語をerに書き改めよ。

Ich kann mir denken.

平均点32点, 100点24%・0点62%

問題B. 受動態に書きかえよ。

Er liebt meinen Sohn.

Sie machte das Fenster auf.

Der Vater hat mich gelobt.

Der Sturm hat das Haus zerstört.

Man schließt die Tür.

平均点20.8点, 100点1.9%・0点49.8%

問題C. 現在完了に書き改めよ。

1. Ich liebe meinen Vater.

2. Er fährt mit dem Bruder nach Tokyo.

3. Du nimmst dem Kind eine Blume.

4. Das Fahrrad fuhr die alte Frau um.

5. Sie ist mit dem Kuhlshrank zufrieden.

6. Wir stiegen in den Zug ein.

7. Ich sehe den Vater hereinkommen.

8. Er muß mit ihnen nach Tokyo fahren.

9. Die Tür wird von ihm geschlossen.

10. Der Verkehr wurde durch einen Unfall unterbrochen.

	A	A'	B	B'		A	A'	B	B'
1.	88	74	64	65%	6.	30	36	10	8%
2.	76	68	50	50	7.	52	38	5	3
3.	74	60	36	47	8.	36	23	17	18
4.	46	47	22	21	9.	56	36	7	35
5.	46	51	36	44	10.	42	36	0	12

オールオアナッシングの厳しい採点ではあるが、それにしても低い正解率である。問題Cの表は、ABは前期、A'B'は後期。Aは一年、Bは二年である。Bの一年のときのデータは示されていない。すべてが平易な文であるから理解はできても、書き替えとか作文の能力はついていない。それどころか時間とともに軒なみに低下していく傾向が見られる。

単語が正確に読めない、作文力は低下していく、辛うじて読解力はある。このアンバランスを何とか解決しなければならない。バランスを欠いて進めば、早晚読解能力もストップしてしまうであろう。「学部段階(初級文法)における書く訓練は、書くこと自体のためよりも、むしろ読む能力を養うために必要だと思われる」からである。

(2)

ラドーが述べる外国語の困難度の認識として挙げるのは次の3点である。(1)母国語と形も意味も分布も似た容易な語。(2)母国語と語形の似ていない平均的に困難な語。(3)習得が特にむづかしい問題のある語。そして英語を母国語とする国民に対するドイツ語の例として整理したものが以下である。

(1) die Hand, die Lampe, die Demokratie, sehen, hart

(2) der Regenschirm, die Kraft, bewachen, plötzlich

(3) der Betrag, der Beitrag, der Vertrag, der Vortrag, verhältnismäßig, an, auf, bis, zu, nach 等の前置詞

英語既習の学習者には上の(1)を順序としてまず与えるべきであろう。しかし英語のcontributionを知らない者にはder Beitrageも難しい単語ではないかも

知れず、早い時期でなければ *verhältnismäßig* も造語の面白味から案外素直に頭に入るかも知れない。同韻の語を並べても物理的・刺激以外のいくつかのプロセスが働くのが常であるから一概に結論を出せない面もあるであろう。(刺激—媒介反応—媒介刺激—反応のプロセスも軽視できない) したがって導入の段階でどのような語から提示し、発音の練習をさせるかは難しい問題である。

初級の文法の教科書の発音の部分は、母音・複母音・子音の順から成り、発音記号が付され、語義を併記し、平均各三語が例示されているのが普通である。発音記号は初めての語に出会ったとき、しかもどのように発音すればよいのか迷うときに、学習者にプラスになるかどうか。ある程度までの英語の力を持っている学習者に、単語の意味を同時に与えることは、推理したり類推したりする積極的態度を最初から奪ってはいないか。各三語ほどの例示で発音練習が十分にできるか。数が多ければすむのか。発音練習のなかで語いを増やすことも意図すべきなのか。入門の初期のこの発音練習のなかで何かもっと有効性のあるものを自然に伝達する方法はないのか。母音・子音・複母音の順でもよくはないか。少なくとも二頁、多くて八頁ほどの「発音」教材にも、以上のような問題点が潜んでいるのである。

この問題のいくつかを解明する手がかりとなるものが、学習形態の筋道の全く異なるドイツの国語の教科書のなかに探れないものであろうか。小学一年次の子供は約16000語を知っており、自由に話しているが、読む力、特に書く力はゼロ状態から始めている。特異な教育方針で知られるシュタイナー学校では、König を König という文字を与えることをしないで、K を大きく書いて(ページいっぱい)に頭と手足をつけた王様を描いてK を強く印象づける方法をとる。建物の二階部分にHの字がかくされ、屋根は丸屋根でDが寝かされた画を描いて、HausとDachのHとDを印象づける。大文字ひとつを覚えさせるだけで、これだけの手間をかけている。単語、句、文となると、一日目がICH、翌日が二行にわけてICH UND DU、次の日がSIND WIR。入学後一ヵ月後に初めて下のような文を書く。

+ ICH + UND + DU + SIND + WIR +

+ WIR + SIND + DU + UND + ICH +

十の印で説明抜きで分かち書きを指導訓練している。またクレヨンを使って指示どおりの色分けで書いて自然に文中の語の働きをわからせる。たとえば、

KOMM + HER + LIEBES + HÄSCHEN
オレンジ むらさき みどり 赤 青

三ヵ月後にようやく正書法にのっとった完全な文が書けるようになる。

DA + DIE + KETTEN + SINKEN + NIEDER +
FREI + IST + DAS + PRINZESSCHEN +

WIEDER + Da die Ketten sinken nieder, frei ist das Prinzesschen wieder.

約16000語の単語が混沌とした形で統一なく頭のなかに入りこんでいるため、音と綴りの一致のさせ方、名詞の大文字書き、コンマ、ピリオド、語と語の分かち書きをひっくりめた正書法はドイツの子供たちには非常に困難な仕事であるし、教える側も文法用語を使わず、規則を暗記させたりする方法をとらずに教えこむには並大抵の苦勞では済まない。シュタイナー校と異なる公立校では、進度ははるかに速いが、小学校二年生でも次のような誤り書きをしているのが実状である。(正→誤の順)

lied→lib, sehr→ser, viel→vil

wieder→wider, gehst→gest,

Bild→Bield, Bilt, hoffe→hofe,

Heimat→heimad, gemalt→gemald

daß→das, traulig→trulich

日本の学生ならまちがうはずのない誤りや、一挙に四、五百年前の古いドイツ語が記されている。

公立校の二年次の国語の教科書でDとTを扱うとき次の順で確認学習を進めている。

1. 母音の前のD, Tを使って語を組み立てる。ヒントとして絵が示される。
2. 同韻の語を探す。
3. 名詞の語頭の文字に下線を引く。
4. 3の語群のdとtの発音に注意する。
5. 語末にdとtを持つ語に幾つかの母音を入れ同韻の語を作りdとtの発音に注意する。
6. 複数形から単数形を見つけ出し、単数になればdが[t]と発音することに気づく。
7. 名詞に形容詞を冠して書き、読む。その形容詞に下線を引く。(その際、形容詞はdかtが語末になるものが選ばれている)
8. 7の形容詞の語尾を除いた形を書き発音する。
9. 物語を読み、犬、テント、友人、森を空所に入れて(ともにd, tで終る語)物語を完成する。
10. 語末にd, tを持つ名詞で語頭の一字が欠けたものを見て、幾つかの語を作る。

生徒たちは以上のようなゆるやかな歩みで、言語と書記素を連合させる訓練を受ける。このような方式で量は減るものの第八学年まで、いわゆるドイツ的

効果的なドイツ語教育法(2)

徹底性で鍛えられる。d と t だけでこの量なのだから、b-p, g-k, f-ff-v-ph, z-tz, s-ß, au-äu-eu, ei-ai 等に及べばその学習量は膨大な量にのぼる。演繹する力をまだ持たない児童には、実にこの方法しかないのである。これに比較すれば、日本の低学年次の国語教育はまことに楽なものである。ひらがな文字を覚えれば、それ以外の読みがあるはずはなく、拗音・促音・「は・わ」「お・を」「え・へ」の使い分けができれば、ひらがなだけの正書法の指導には特別の指導はいらないのであるから。(送りがなの指導の厄介さはあるものの)

日本のドイツ語を始める学生が聞いたことのある語は登山やスキー関係の用語くらいで、文字を読むことから始めるので、つづり字のための訓練を上のようにやる必要はないが、割に楽に読める単語が多いので、読むことに力を傾けようと努力する学生は少ない。どうしても文法規則の記憶に重点を置きがちである。教える側もその傾向が強い。演繹力のある学生だからそのうち読めるようになっていっているうちに、ある時期に来てほとんど読めない学生がいることを発見することがある。

ドイツの児童のための国語の教科書に見られる特徴は、積極的に書かせること、緻密な段階を踏んで系統的に進めていくこと、興味を持たせることに工夫をこらしていることの三点であろう。ドイツ語入門の教室の中の学生はまったく受身の姿勢を強いられている。書く時間もいたって少ない。興味のない(1)に掲げたような文が多く知的関心と呼ぶ魅力に乏しい。導入のこの時期に発音の習得段階から、積極的に取り組み、何かを発見し想像し類推しつつ、さらに刺激を受けながら書く作業をするようにできないか。発音の索引的な表以外に発音教材に工夫をこらしてみてもどうか。その際、発音は発音、文法は文法という姿勢を取らず、その中に文法のルールもある程度入れこんで、自然にドイツ語の構造が見えてくるような構成をとってみる。発音のための索引表ではないのだから、従来のような母音(長・短・複)と子音(有声・無声)の順でなくともかまわない。母音——子音——複母音——子音の順にした方が読む語材料の数が増加するのである。名詞には最初から定冠詞をつけておく。複数形も系統的に提示しておけば、後で複数形を学ぶ必要はほとんどなくなる。複数形を見れば、単数は何だろうと考えるのは当然だし、複数形を見てその種類によって整理することも可能になってくる。清・濁音の区別も、ここで十分にできるのである。(-d, -der 等) また

不定詞はすべてカッコ内に入れておけば、いわゆる Root に当たるドイツ語は -en, -ln, -rn で終わることも説明抜きで分からせることができる。ときに動詞の活用した形も形容詞を名詞に付した形も出しておけば、発音のよい練習材料にもなり、名詞につく形容詞まで変化するのかという驚きが生まれてくる。初期から鮮明な印象を受けるよう提示する語を選ぶ必要がある。変化するとすれば、どのようなルールがあるのだろうかという疑問を抱かせることが大切である。長・短音も考えさせる配列をとる。

さらに従来のように発音記号や意味を添えることは一切しない。ここでは語いを増やすことが目的ではないので、まずは読むことに専念させる方法をとる。意味は口頭で述べるだけで済ませ、英語から類推できそうな語の意味は伝えることをしない。複数形は単数形を教えない。学習者は自然に辞書を引くようになる。発音練習の段階から辞書を使わせるのである。

以上はかなり欲張りな要求であるが、発音は発音だけの教材としないことを前提に、また英語の既習者であるという条件をプラスの方向にもっていく一手段である。次に発音練習教材を並べる。

無冠詞の語は固有名詞・下線語は複数形である。

a.

der Ball, das Tal, das Blatt, der Name,
der Mann, die Lampe, Rabe, die Karte,
Kant, alt, glatt, (halten)

e.

das Ende, die Feder, die Treppe, das Leben,
Hegel, Berge, (enden), (leben), (essen), edel
eden, (geben), (retten)

i.

ich, wir, die Bibel, die Lippe, der Tiger,
Berlin, Grimm, (erinnern), (hindern)

o.

Bonn, der Morgen, das Brot, der Sommer,
tot, oben, dort, groß, (kommen), (loben)

u.

die Luft, der Hut, der Hunger, die Blume
die Mutter, unter, gut, dunkel, (rufen), dumm,
aa, ee, oo, ie.

das Haar, der Saal, Raabe, der Tee, das Meer,
die Seele, Klee, (leeren), leer, das Boot,
das Moos, Buddenbrooke, die Liebe, (lieben),
(liegen), hier, Briefe, Tiere, (regieren)
(spiegeln)

h.
die Bahn, die Ruhe, Brahms, Uhren, (ruhen),
(wohnen), (gehen), (fahren), mehr
s.
der September, Nasen, Rosen, die Sitte, sehr,
sieben, (lesen), (sehen), (sein), (reisen),
Er ist. . . , Er reist. . .
b.
der Herbst, der Dieb, halb, lieb, grob, gelb,
der liebe Gott, ein grobes Benehmen, (haben)
das Gelbe Meer, Die Blätter sind gelb.
d.
Doktoren, Kinder, das Geld, rund, mild, wild,
endlich, fremd, gesund, (finden), (baden),
ein fremder Mann.
g.
der Tag, der Flug, der Krieg, Hamburg,
(fragen), gefragt, (weggehen), (legen)
ch.
ach, acht, die Nacht, Bach, dachte, machte,
der Koch, das Loch, das Buch, das Tuch,
Kuchen, auch, (rauchen) / mich, die Milch,
wichtig, China, München, (brechen), durch
sch.
die Schatten, der Mensch, das Geschenk,
die Schule, der Schnee, (forschen), (waschen)
tsch.
Deutsch, Deutschland, der Deutsche,
ein Deutscher
ä.
Männer, Wände, Hände, Bänder, Länder,
Nägel, Gräser, Räder, Händel, älter,
ö.
der König, der Löwe, die Königin, Wörter,
Söhne, (öffnen), (hören)
ü
der Frühling, (füllen), (lügen), (zurückkommen),
dünn, über, müde
ai.
der Mai, der Kaiser, der Hain
ei.
zwei, drei, frei, klein, enig, nein, seit,
breiter, die Arbeit, Kleider, Feinde,
die Heimat, die Freiheit, das Seil
au.
das Auge, die Frau, der Traum, der Laut,

(kaufen), (hauchen), auf
äu.
das Fräulein, die Bäuerin, Häuser, Bäume,
(träumen), (läuten)
eu.
der Teufel, das Feuer, Freunde, Leute, neu,
neun, (freuen), (deuten), deutlich
ss, ß
Hesse, das Wasser, Geheimnisse, (hassen),
(lassen), (küssen), besser
die Straße, (grüßen), (heißen), süß, groß,
Er haßt. . .
sp.
das Spiel, der Sport, die Sprache, (sprechen),
(springen), sparsam, spät, Spengler, (spielen)
st.
Einstein, der Stern, der Staat, die Station,
Stimmen, die Straßenbahn, (stehen), (stärken),
der Student, stand, stark, still, (verstehen)
v.
der Vater, das Volk, die Vernunft, brav,
(verlieren), (verkaufen), (vergessen)
w.
der Wagen, Winter, die Schwester, wieder,
was, wer, wo, wann, (werden), wird
j.
Japan, der Januar, der Jacke, die Jugend,
Jahre, ja
z.
Das Zimmer, Mozart, das Herz, Zähne,
kurz, (tanzen), ganz, zehn, der Dezember,
ig.
mächtig, feurig, nötig, wichtig,
die Ewigkeit, Königsberg
ng.
der Finger, die Wohnung, Ringe, England,
(singen), ging, lang
chs.
der Ochs, der Fuchs, Sachsen, (wachsen),
sechs, Du machst. . .
x.
die Text, das Examen, das Taxi, Xanthippe
dt.
die Stadt, der Gesandter, beredt,
Er lädt. . .
ds, ts, tz.

効果的なドイツ語教育法(2)

abends, nachts, nichts, jetzt, rechts, (sitzen)

pf.

die Pflanze, die Pflicht, der Kampf,

(pfeifen), (pflegen), (kämpfen), (klopfen)

qu.

der Quelle, quer, bequem

次は読み上げて一字を入れさせる。語末のeに特に注意させる。英語流に-te, -deを[t], [d]と読みがちだからである。

der Man(), das End(), (f()nden), (k()mmen),
d()nkel, die Kält(), (kön()en), die Hütt(),
dün(), der Löff()el, die Trän(), der H()t, g()t,
das Br()t, die B()ebel, der Te(), das Ha()r,
m()n, das Me()r, der Bri()f, das Bo()t,
die Flöt(), (l()gen), im Ma()

次は読み上げて一字か三字を入れさせる。[f]を定着させる問題の一部である。

der ()piegel, ()till, der Ti()(()), (()tehen),
()pielen), (ver()tehen), (()prechen), der
()(()üler, der ()tern, die ()traße

詞論中心の文法書を使うとしたら、動詞の人称変化・定冠詞・不定冠詞の学習を終えた時期に下の教材を用いて文の部分書きをさせる。文の意味を考えながら、発音を聞き分け文字にするのである。

Peter Kühn ()(() ()tudent.

Er ()tudier() in Köln ()o()iologie und
Politolog()(().

Die ()niversität Köln ()(() ()ehr bekannt.
Michael Neuman()(()(() noch ()(()üler.
Er besuch() das Gymna()ium in Köln und
mach() gerad() das Abitur.

()päter ()tudier() er vielleicht in München
oder Berlin.

Inge Berger ()(() jetzt Kranken()(()-
wester. ()ie ()(() immer se()r beschäftigt.

Das Krankenhaus ()(() neu und ziemlich
gro().

A: ()in() S()(() ()tuden()?

B: Ja, ich ()tudier() ()o()iologie und
Politolo()(().

A: Wo ()tudier()(() ()ie denn? in Frankfurt?

B: Nein, die ()ni ()(() in Köil. ()nd was
()(()(() Sie? Au()(() ()(()dent?

A: Nein, leider no()(() nicht. Ich besuch()
no()(() das Gymnas()um.

B: Was ()(()(() Sie von ()eruf, Fräulei C?

C: Ich ()(() Kran()en()(()wester. Dort
()(() das ()ran()enhaus.

B: Wie ()(() die ()rbeit denn?

C: Hm, anstrengend ()(() ()ie schon, aber
au()(() inte()essant.

B: Wer ()(() das?

C: Wer? Der ()err dort drüben? Das ()(()
()okt()r Kreuzer. Er ()(() ()rzt und
()ehr net().

Taro komm() aus Japan und ()(()udier() in
München. Er ha() ein ()immer ()(()denten-
heim. Das ()immer dort ()(() nicht be-
sonder() gro(), aber es ()(() ()ehr modern
und vor allem preiswert. Das ()eben in
Deu()(()(()land ()(() ziemlich teuer,
aber Taro ha() ein ()tipendium. Das ()tu-
dium find()(() er natürli()(() no()(() etwas
()(()wer, denn er spr()ch() no()(() nicht
so gu() Deu()(()(().

K: Wie lang()(()(() du denn ()(()on in
D()(()(()land?

T: ()ngefähr einen ()onat.

K: und wie find()(() du das Leben hier?

T: ()etzt ()(() es noch etwa() ()(()wer.
Du s()(()st, ich ()prech() no()(() nicht
so g()t D()(()(().

K: Was? Du spr()(()st doch ()(()on gan()
prima. Du, ich ha()(() es eili(). Aber
heut() aben() ha()(() ich viel ()eit.

Ge()en wir zu()ammen ein ()ier trinken?

T: ()a, prima! Heut() aben() ha()(() ich
auch ()eit.

K: Al()o Tschüß, bis heut() aben()!

T: Tschüß, Kurt!

(3)

英語とドイツ語の構文の類似するところと、相違するところを、初期の段階で、学習者に強く印象に残る形で認識させておく必要がある。受け入れる能力があり、学ぶ意欲の充ちているときに、これを与えない法はない。自力で未知の外国語が、ある導入の仕方では、相当程度の文が理解できるということが分れば、その後の文法を学ぶ姿勢が根本から違ってくる。

その方法として、文法用語は一切用いず、単純な記号表記により、しかも例示は英文を用い、使用する

る語は、動詞10語程度、名詞20語程度、僅かな接続詞・形容詞・前置詞で、項目は20とする。定形の正置・倒置・後置を集中的に把握させる法である。提示する時期は、極端に言って発音練習直後でもかまわない。刺激のある興味につながる発見学習たりうるからである。易から難への過程を丹念に洩れなく教えようとするのは、語学の場合に限って言えば、決してすぐれた方法とは言えない。

英文による記号の例示

I believe /that/ he is a man of character.
/Within a century of her death/ her letters
had become /one of the monument of Spanish
literature/ and her life and times have
ever since been /the object of long studies.
/When/ the swallow flies low we may expect
rain, for /if/ the air ist moist or there is
rain in it, the insects /on which/ he feeds/
fly low.

1. Hans ist Student. Er ist fleißig.
2. Ich bin auch Student, aber ich bin
nicht so fleißig. Er ist fleißiger als ich.
(bin=am, als=than)
3. Er wohn(t) in Hamburg. Ich wohn(e)
jetzt in München. (wohnen=live)
4. Die Mutter schenk(t)
dem fleißigen Sohn /ein Wörterbuch.
(schenken=give)
5. Ich hab(e) zwei Söhne
und eine Tochter.
6. Herr Schmidt geh(t) /mit dem Freund/in
die Stadt/. (Herr=Mr. mit=with)
7. Wo geh(st) du /nach der Schule/?
(nach=after)
8. Was lern(st) du?
Jetzt lern(e) ich Deutsch.
9. Sie komm(t) heute nicht,
/weil/ sie schwer krank ist.
(weil=because)
10. Heute besuch(t) sie die Tante.
11. /Wenn/ ich morgen Zeit hab(e),
besuch(e) ich die Tante.
(wenn=if)
12. Es ist gut,
/daß/ du jetzt fleißig Deutsch lern(st).
13. /Als/ wir in Berlin ankam(en),
regnete es stark. (regnete=rained)

14. Ich bin gestern ins Kino gegangen
und habe einen interessanten Film gesehen.
(gegangen=gone, gesehen=seen)
15. Ich muß heute abend den Onkel besuch(en).
16. Ich werd(e) heute meinen Onkel besuchen.
17. Der Film, ist interessant.
/den/ ich gestern gesehen habe.
18. Im Winter geh(t) die Sonne spät auf
und geh(t) früh unter.
19. Das Buch wird von dem Vater geschrieben.
(geschrieben=written; von=by)
20. Hast du keine Lust,
in der Firma meines Onkels zu arbeiten?
(zu arbeiten=to work)

Anmerkungen

- (1) 藤田五郎：展開値中心——新和文独訳、第三書房 1975
- (2) 大岩信太郎：スタンダード初級ドイツ語読本、朝日出版 1978
- (3) 日本独文学会編：ドイツ語教育の基本的諸問題「統一試験の結果とそれに基づく試案」南江堂 1971
- (4) 共通一次試験のような誘導式によるものであれば、このような低率にはなるまい。例・54年(9)
- (5) 日本独文学会：ドイツ語教育部会会報12 柴田翔「独文科独語科におけるドイツ語教育」
- (6) R. ラドー：外国語教育——科学的学习指導法、織谷馨訳 明治図書 1970 p.154
- (7) W.M. リヴァース：外国語教育と心理学 五十嵐二郎訳 紀伊国屋書店 1967 p.118
- (8) R. ラドー：p.179 ドイツの児童にもほぼ当てはまると考えられる。
- (9) 子安美知子：ミュンヘンの小学生 中央公論社
- (10) 浜川祥枝：現代ドイツ語 白水社 1975 p.16
- (11) Mein neues Sprachbuch 2~8 Schroedel 1973
- (12) 脇坂 豊：ドイツ語教授法の問題点 上の(3)掲載の論文で「接続詞などはかなり大胆に始めの段階で示してもよく」
- (13) 正確には wohnen=to live であるが、20との関連で敢えて live とした。

効果的なドイツ語教育法(2)

参 考 文 献

近藤 弘他：ドイツ語との出会い 三修社 1980
宮内 敬太郎：新しいドイツ語 三修社 1980
小島 公一郎他：現在のドイツ語 南江堂 1975
岡田 朝雄他：新訂大学のドイツ文法 朝日 1978

淵田 一雄：簡要ドイツ文法 白水社 1980
半田 恭雄：一冊目のドイツ文法 白水社 1978
日本独文学会東海支部編：ドイツ語発音練習 三修社 1979
共通一次テスト、外国語編 53, 54年度分。